

キナバル山と Deramakot 商業保護林地域の土地利用変遷

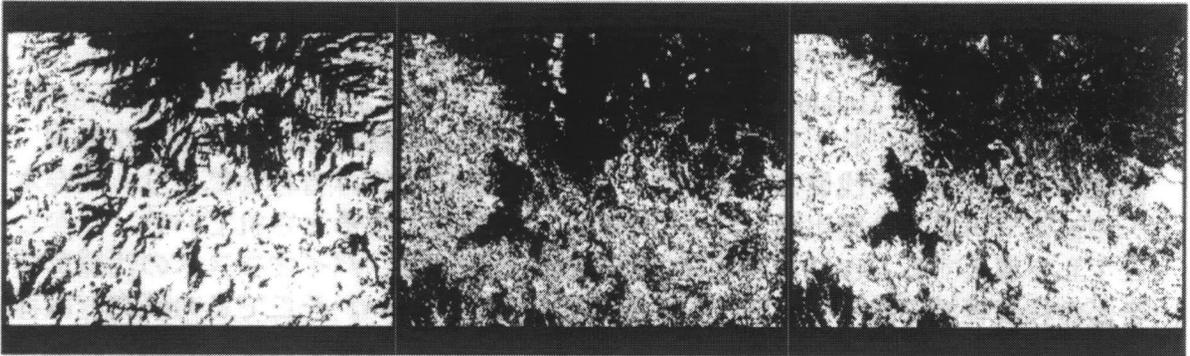
Mulyanto Darmawan (東大) ・北山兼弘 (京大)

サバ州では過去30年間に急激な土地利用による森林減少が生じたが、土地利用変化の速さ、面的様式、利用形態が地形(標高)によって異なると想像された。その理由は、気候が原植生や利用形態を支配しているためである。これを検証するために、キナバル山南面(標高4095m-600mの急峻な地形)とDeramakot(約200mの波状丘陵~平地)に、それぞれ14,805haと351,011haのトレーニング・エリアを設定し、ランドサット・データによる教師無し分類を行った。キナバルでは、焼き畑・高原野菜栽培により、土地利用変化は小規模パッチ状に進行した。Deramakotは伝統的な集落から遠く、土地利用形態はより近代的であり、それは商業伐採とオイルパームのプランテーション造成により大規模一斉状に進行した。同じ1991年から2002年で比較すると、キナバルでは保護区周辺で約550haの原生林が減少する一方、約2500haの耕作放棄後の植生回復(主に二次低木林へ)が見られ、回復と裸地化は拮抗した。Deramakotでは、森林消失が一方向的に進んだ。このような、土地利用形態の違いは、生物多様性にも異なる時空間的な影響を及ぼすだろう。Deramakotでは、低インパクト伐採が実施されているが、教師無し分類の結果では従来の破壊的な伐採施行区との区別はできなかった。今後、点で行われているチーム・メンバーの生物多様性観測結果を広域に外挿するために、より精度の高い森林分類が必要になるだろう。これは次年度以降の課題である。

Kinabaru 12.Jan.1973

14.Jun. 1991

19.May. 2002



Deramakot 25.Aug.1985

22.May. 1991

28.May. 2002

